

復刻版



日本植民地文化運動資料 11

戦時下、朝鮮最大の文芸・文化雑誌。日本近代文学の暗部を照らす「植民地文学」の第一級資料！

國民文學

全12巻◆別冊1

人文社編「一九四一年〜一九四五年刊」

〔監修・解題〕大村益夫

綠蔭書房

刊行の辞

戦後五十年をへて近年、日本植民地や占領地における文学的作品、活動に関する研究や資料の刊行が盛んに成りつつある。同様に中国でも自己の文学史の暗黒時代の研究に目を向け始めている。旧満洲の中国東北部では、「東北淪陥十四年史編纂委員会」を中心にすでに多くの成果を生んでいる。さらに日中共同研究や研究者の往来、シンポジウムの開催など、開かれた研究、議論の場が築かれている。同じ情況は台湾にもある。研究の蓄積や交流の歴史では台湾の方が早い。こうした中国における研究に比べ、朝鮮における第二次大戦下の文学の研究は遅れている。正確に言えば、「親日文学」という言葉に象徴されるように、植民地末期の朝鮮人作家の作品や活動は否定的対象であり、近代文学史からは排除される存在であった。それでも近年、林鍾国の先駆的な研究に続く若手研究者も徐々に出てきている。

今回刊行の『国民文学』は一九四一年一月、朝鮮人による植民地下唯一の文学誌として創刊された、いわゆる「親日文学」を象徴する雑誌であった。総督府は朝鮮人作家に対する言論抑制、紙面削除等物質、思想両面での統制をおし進め、四一年五月、雑誌統制により多くの朝鮮語雑誌が廃刊された。『国民文学』（発行人文社）の編集兼発行人となる崔載瑞は時局の政策に合わせ『文章』『人文評論』を廃刊統合し、改めて朝鮮人中心の文人団体の機関誌として刊行。当初は朝鮮語版年八回、日本語版年四回の刊行が、翌年には日本語（国語）のみに統一され、総督府の指導の下、日本語常用運動、朝鮮人の皇民化運動にも大きな役割を果たしていく。紙面の面でも、小説、詩歌、評論、随筆などの文学関係、映画論や美術論のほか総督府関係者、京城帝大教授らの時局啓蒙論も収録した。また執筆者も朝鮮人作家のほか在朝日本人も多く、彼らにとって重要な発表機関であった。朝鮮はもとより植民地・占領地における文化、文学活動や日本近代文学にとってのアジア像等を研究する上で、『国民文学』誌は不可欠の資料である。同時に朝鮮の皇民化研究の資料としても広く活用していただきたい。今回の刊行にあたり現存誌は全て収録した。

一九九七年八月

緑蔭書房

「内鮮一体」を受容した朝鮮文学者たちの苦悩と、厳しい状況下にもかかわらず消しえぬ民族的情緒を記録に残した“植民地文学”。その貴重な資料の復刻成る！

「日本植民地文化運動資料」関係年譜

- 明治39年 南満洲鉄道株式会社創立
- 明治40年 満鉄調査部に図書室設置（後の大連図書館）
- 明治43年 韓国併合
- 大正3年 第一次世界大戦勃発
- 大正5年 南満洲司書会成立・南満洲司書会雑誌・創刊
- 大正7年 大連図書館創立
- 大正8年 朝鮮三一運動
- 大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称
- 大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任
- 大正12年 哈爾濱図書館設立
- 大正14年 朝鮮総督府図書館創立
- 大正15年 『書香』創刊
- 大正15年 大連で実験放送開始（植民地での最初の放送）
- 昭和3年 『朝鮮時論』創刊→昭和2年張作霖爆殺
- 昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始
- 昭和6年 『書香』復刊→19年休刊
- 昭和6年 満洲事変
- 昭和7年 上海自然科学研究所設立
- 昭和7年 満洲国建国
- 昭和10年 満洲国協和会（のち「満洲帝国協和会」）設立
- 昭和10年 朝鮮総督府図書館報『文獻報國』創刊→19年廃刊
- 昭和11年 奉天図書館『収書月報』創刊→18年休刊
- 昭和12年 『中国文化情報』創刊→16年終刊
- 日中戦争始まる（7月）
- 満鉄附属地の行政権を満洲国に移譲
- 『図書館新報』第1次創刊、17号より『満洲読書新報』と改題
- 昭和13年 国民精神総動員朝鮮聯盟創設
- 昭和14年 『協和運動』創刊→20年終刊
- 『北窓』創刊→19年休刊
- 昭和15年 『総動員』創刊→15年11月（第2巻第11号）より『国民総力』と改題され20年終刊
- 昭和15年 『満洲放送年鑑14年版』刊行（翌年15年版刊）
- 昭和16年 太平洋戦争始まる
- 『国民文学』創刊→20年終刊
- 昭和20年 日本敗戦



監修の辞

『國民文學』誌は一九四一年一月から一九四五年五月まで、ソウルの人文社から発行された月刊文学雑誌である。太平洋戦争直前に、思想統制の要と用紙難という事情から、他誌を廃刊し、朝鮮半島唯一の文学雑誌として創刊された。主幹は崔載瑞、執筆者は朝鮮人文学者も在朝日本人もいた。

元来、年四回日本語版、年八回ハンゲル版という予定でスタートしたけれども、実際はすぐに日本語のみの誌面になった。編集要綱にも「国体觀念の明徴」「國民意識の昂揚」「國民士氣の振興」「国策への協力」「内鮮文化の綜合」などがかけられ、誌面はいわゆる「親日文学」が大勢を占めている観がある。

しかしながら子細に行間を読めば、日本語でなりとも民族文化を維持発展させようとする朝鮮人文学者の意図もうかがえ、身動きできない状況の中でも民族の誇りを失うまいとする良心のひそやかな声を聞くこともできる。

当時、「国語常用」というスローガンのもとに、朝鮮人文学者に対しても日本語による創作が強要された。これには多くの苦痛が伴なわざるをえなかった。といってもはや、筆を折って沈黙することも許されない状況にあった。

そうした中であつて、多くの文学者たちは面従腹背、何重もの仮面をかぶつて生活し、時に屈辱的な言葉も弄しながら作品活動をせざるをえなかった。当時『國民文學』の書き手と読み手が、秘儀にも似た共通の了知のもとで作品に対したであろうことを思えば、現在の読者も書かれた文字を表面の意義通りに受けとってはならないだろう。

『國民文學』誌は朝鮮文学者たちの苦悩と、厳しい状況下にもかかわらず消しえぬ民族的情緒とを記録に留めたという意味で、解放後の文学への連続性を持ちえたといえるのではなからうか。

川村 湊

文学史の空白期を埋める希観のテクスト

「親日する」という言葉は日本語としては奇妙な感じがする。しかも韓国ではこの「親日」が人倫に悖る悪逆非道な行為として糾弾されていることを知れば、「日本人」であることがおぞましく思われてくるだろう。宗主国日本に「親しんだ」朝鮮人たちを彼らの間では「親日した」人々、「親日派」と呼ぶ。文筆をもってそれを行った者が「親日派文人」「親日文学者」である。しかし、元・親日派の少なくない韓国の解放後の文学において、それらの「親日文学」は巧みに記憶や記録から消され、文学史の暗黒期、空白期として処理されてきた。植民地朝鮮で出されていた「国民文学」は、まさにこうした「親日文学」のまぎれもない証跡である。だからこそ、この悪名高い雑誌は、韓国でも日本でも、ほとんど目に触れることも少ない、希観のテクストとして「隠蔽」され続けてきた。隠し、忘れさせようとしてきたのは誰か。その答えは「国民文学」の一頁一頁にある。

〔文芸評論家・法政大学教授〕

三枝壽勝

『国民文学』刊行によせて

閉塞した暗い時代の文学雑誌として『国民文学』は必読の資料だ。私もかつて、韓国の図書館を巡り歩いて読んだが、年代順に通して読むと、個々の作品と時代の移り変わりや背景との関連の中で、金南天、「ともしび」、金史良、「太白山脈」、崔載瑞「民族の結婚」などが光って見えた。そして朝鮮人は決して日本人になろうとはしていないこと、日本式の考えや日本語を通しては朝鮮人は理解できないこと、結局は朝鮮語の作品を原文で徹底して読む努力をしないことを痛感させられたのだった。

〔東京外国語大学教授〕

日本植民地文化運動資料 1 3

植民地満洲の学術・出版の実相を克明に記録、昭和激動期の文化状況を伝える総合書評誌／

1 書香

本誌の内容は、大連を含め各満鉄図書館の記録、満洲の出版界の動向、北アジア大陸の諸文化、関東軍の動向に関連した情報、各種の文献目録等多岐にわたる。満鉄図書館史はもとより、満洲史、中国史、軍閥係史、アジア史研究にとって資料の宝庫。

全8巻・別冊1／満鉄大連図書館編
大正14年4月・昭和19年12月 全158冊
解題 稲村徳元 本体価格140,000円

満洲文芸、北方文化に関する貴重な記事・作品、文献・資料の紹介に努めた総合文化誌／

2 北窓

満洲学芸史研究上、重要な意味を持つ本誌は、満鉄傘下の図書館報の枠を超え、在満邦人の知的要求に応えた高級でモダンな総合文化雑誌であった。その内容は歴史・民俗・芸術・教育・出版・書評など、満洲における文化事業の全般に広く及ぶ。

全5巻・別冊1／満鉄哈爾濱図書館編
昭和14年5月・昭和19年3月 全26冊
解題 西原和海 本体価格80,000円

満洲史、清朝史、対露交渉史など質の高い研究論文を多数所収。東北アジア史研究に必須／

3 収書月報

本誌の特色と内容は、何よりも館長藤利夫の個性と情熱によって収集された満蒙・シベリア等辺境研究図書に表われている。質量ともに充実したこれら資料を駆使した多数の研究論文や書籍・雑誌解題や紹介は、東北アジア史研究に必須の基礎資料。

全8巻・別冊1／満鉄奉天図書館編
昭和11年2月・昭和18年9月 全91冊
解題 小黒浩司 本体価格132,000円

宮田節子

皇民化政策研究の ためにも貴重な資料

『國民文學』は、崔載瑞の主幹で、一九四一年一月に創刊され、四五年五月に終刊となる。四〇年八月一日、『東亜日報』『朝鮮日報』の二大民族紙が強制廃刊されて以来、朝鮮人作家は発表の場を失い、しかも当時の用紙難のため作品を発表していた文学誌が統合され、『國民文學』が誕生した。当初年四回は日本語版、残りの八回は朝鮮語版の予定であったが、二巻四号からは日本語版のみになってしまった。これは単に用語の問題ではない。皇民化の嵐の中で、朝鮮人作家の生き方そのものの問題であった。

『國民文學』はひとり朝鮮文学の研究者のみならず、当時の皇民化政策をより深く解明する上でも、かけがえのない資料である。最近日本でも韓国でも、この時期に関心を持つ若い研究者が増えているが、『國民文學』を駆使した研究の出現を望んでやまない。

〔朝鮮史研究会会長〕

金允植

『國民文學』誌が置かれた 今日の位置

「近代」の世界史的普遍性である国民国家の成立を韓国近代文学史も前提として、とすれば、日帝の植民地支配における民族・言語の同和政策の下で、韓国語で書かれていないものはこの範疇に入らない。また韓国近代史の特殊性が日帝強占期における反帝闘争、反封建闘争等にあるとすれば、韓国語で書かれたものでも親日的なもの除外される。つまり、こうした韓国近代史の状況との文学的闘争が韓国近代文学史である。日帝支配下に出された在朝日本人を含む朝鮮人中心の『國民文學』誌の性格もこの韓国近代史の普遍性・特殊性を色濃く反映している。しかし今日の視点で、朝鮮語が完全に抹殺されたのちの暗黒期（空白期）に、人工語の一種としての日本語が作用したことを考慮するならば、日本語で書かれた韓国作家の作品について論議の余地がなくはない。今日的視点とは、近代の超克ともいわれる国民国家の解体が進む中では、どんな国語も一種の人工語といえるだろうし、こうした議論を可能にするきっかけを、『國民文學』誌が提供しているといえよう。

〔ソウル大学教授〕

日本植民地文化運動資料 4

満洲文化の向上を企図して刊行した唯一の誌
書雑誌！

4 満洲讀書新報

本誌は満洲における読書文化の発展に貢献することを使命とし、満洲の文化人に発言・寄稿の場を広く提供した。その紙面は満洲の出版界・読書界・図書館界の動向はもとより、隨筆・書評・書誌・書論・古本趣味、図書紹介等極めて多彩で、興味は尽きない。
全2巻・別冊1／満洲圖書同好会編
昭和11年1月／昭和20年4月、全95冊
解題／西原和海 本体価格40,000円

日本植民地最大にして戦前では日本最大の図書館報。待望の完全復刻版！

5 文獻報國

本誌は、日本植民地最大の社会教育施設の機関誌として、また文献保存及び重要社会政策であった民衆の教化（皇民化）を目的として大きな役割を担った。その紙面からは随所に植民地政策が読みとれる。「侵略と文化」を考える上へ欠かせない原資料である。
全12巻・別冊1／朝鮮總督府図書館編
昭和10年10月／昭和19年12月、全102冊
解題／藤田豊 本体価格240,000円

日中戦争期の中国研究に欠けていた学術・文化史的側面の資料を埋める貴重な記録！

6 中國文化情報

本誌は日中戦争下の日本の対中国文化活動の状況、蒋介石重慶政権下・日本の傀儡政権下の教育動向、社会科学の動向や中国文化界の動静を知る貴重な資料を収録。近現代中国の教育史、科学史、日中関係史、植民地研究に不可欠の学術情報誌。
全6巻・別冊1／上海自然科学研究所編
昭和12年5月／昭和16年12月、全31冊
解題／阿部洋 本体価格108,000円

國民文學 新年號(舊版)

戰捷の春	(二)
大東亞戰爭の意義	(三)
智識動員の擴充	(四)
大東亞戰爭と文化生活	(五)
矢鍋永三郎	(六)

日米開戦と東洋の將來

(五十篇) 原木剛一・白山青樹・沈明榮・崔鎮午
金島五・鈴木武雄・古川孝男・崔鎮午

古典に現れた日本精神	荻原 淺男 (二〇)
日本文化と半島	森田 芳夫 (三三)
演劇統制の諸問題	星出 壽雄 (四七)
西洋文學への反省	朝山 健 赫 (五四)
舊と新しい(文藝時評)	鄭 寅 燮 (七〇)
白 鐵 (七六)	

音 楽 時 評	大塚 勇之助 (八八)
半島の美術家を語る	山田 新一 (一〇〇)
聖地巡拜記	松本 泰 雄 (九四)
子 安 ち かに	崔 載 瑞 (九〇)

文藝動員を語る

(五十篇) 幸島顯・嶋元勲・寺田 潔・津田 剛
長野 昭三・白 鐵・古川 孝男・本多 武夫
尾野 相傳・松本 泰雄・久保 三郎・八橋 品成
林 和 本 誠 徳 崔 載 瑞

旅の落種	船田 享二 (一〇〇)
友だちの習性	津田 節子 (一〇七)
大乘的風論	韓 雪 野 (一一〇)
朝鮮の食事	飯島 滋 大 (一一三)
眞と教養	山澤 三 造 (一一七)
私事公事	伊達 平 野 (一二七)
浪人の一面	榎 本 龜 生 (一三五)
徳壽宮の朝	崔 貞 照 (一五七)

今後如何に書くべきか! (現役文壇新人) (一六〇)

血

創 金海きよ子	韓 雪 野 (一六〇)
南谷先生	湯淺 克 衛 (一六三)
職場たより	俞 鎮 午 (一九〇)
ムルオリ島	那 珂 孝 平 (一九三)
	金 史 良 (一九七)

主な執筆者

崔載瑞(石田耕造、石田耕人)・鄭人澤・趙容萬・金史良・李孝石・金鐘漢(月田茂)・白鐵・高承洙・吳泳鎮・咸世徳・俞鎮午・徐斗銖・柳光烈・崔貞熙・朱永涉・崔水弘・金午星・李無影・車載貞・韓雪野・李箕永・李石薫(牧洋)・鄭寅燮・趙宇植・李泰俊・朴魯甲・鄭飛石・金南天・金龍濟(金村龍濟)・吳禎民(山田栄助)・郭鍾元(岩谷鍾元)・李光洙(香山光郎)・尹斗憲(平沼文甫)・洪鍾羽(青木洪)

田中英光・那珂孝平・湯淺克衛・吉尾なつ子・奥平修一郎・飯田彬・小尾十三・久保田進男・汐入雄作・宮崎清太郎・三好富子・佐藤清・川端周三・杉本長夫・田中初夫・寺本喜一・則武三雄・百瀬千尋・森田芳夫・本多武夫・黒田省三・鈴木隆盛・木山捷平・萩原淺男・青木修三・近藤時司・楠田敏郎・宮島克一・川合彰武・宮原三治・松岡修太郎・岩倉政治・寺田瑛・福田清人・大内隆雄・島田邦雄・林善之助・青山信介・正久宏之・矢鍋永三郎・吉川江子・齊藤清衛・渡部学・松本卓夫・津田剛・津田節子・松月秀雄・徳田馨・安東益雄・竹内てる子・山田新一・椎木美代子・奥平武彦・田中梅吉・他

日本植民地文化運動資料 7

日本帝國主義による「滿洲國」支配の実態と「協和会」の全容解明に久しく待れた第一級史料!

7 協和運動

協和会の活動は「滿洲國」の國策に沿って、民衆の思想教化を中心に、経済をも含めたあらゆる分野で展開された。そしてこのような協和会の全貌を余すことなく反映しているのが、協和運動である。本誌により、戦時体制下の「滿洲國」をつぶさに見ることが出来る。

全2巻・別冊1/滿洲帝國協和会編
昭和14年6月↓昭和20年4月 全68冊
解題1 風間秀人 本体価格400,000円

8 総動員

朝鮮における皇民化・内鮮一体を促進し、總督府の文化統治政策を担った聯盟の機関誌!

本誌は聯盟員相互の意思疎通を図り、教化運動の徹底を期すために刊行された機関誌。戦時下の朝鮮における皇民化政策の具体的施策と実態を知る基本資料。また、日本の戦時動員政策の全体像の解明にも必須の文献である。

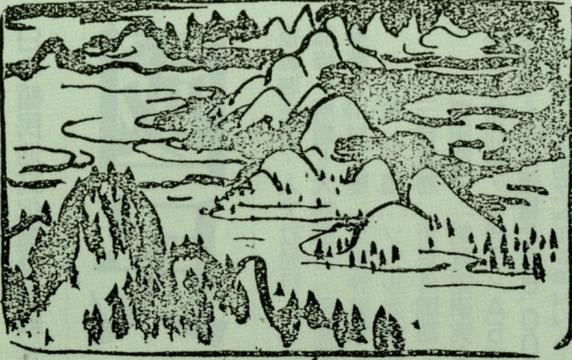
全4巻・別冊1/國民精神總動員朝鮮聯盟編
昭和14年6月↓昭和15年12月 全19冊
解題1 宮田節子 本体価格72,000円

9 朝鮮時論

内鮮一体の融和を標榜する一九二〇年代の朝鮮統治に批判的な論陣を張った極めて稀な雑誌!

本誌は植民地下の厳しい検閲体制の中で、発行を許可された朝鮮語紙誌の記事の翻訳や独自取材のルポなどを通して、植民地下の矛盾にあえぐ朝鮮人の生の声を傾け、蔑視視・優越視の克服を目標とした。一九二〇年代の日本植民地研究、在朝日本人史研究に必備

全2巻・別冊1/朝鮮時論社編
昭和15年6月↓昭和22年9月 全10冊
解題1 高柳俊男 本体価格36,000円



長白山脈を乗越え、蓋馬高原を疾驅して来た西伯利亞の風は、いつしか
 黄海の荒波にさらはれて沈没し去つた。新たに日本海から吹き寄せる生温
 かい風が、金剛一萬二千峰をめぐり、そのはねかえしが太白山脈に跼が
 つて、去年の雪を打ち拂ひつゝ、訪れ参つた春三月、それは今より約六十年
 前、この土に未だ黎明の色染まぬ悲風哀雨の頃のことである。
 虎狼の咆哮に日は暮れ明ける太白山脈でも、飛ぶ鳥さへ阻む程深い谷間
 の中であつた。こゝにまるで幻の如く、火田民の小屋が寥々と点在してゐ
 る。蜿蜒百五十里、漢江の上流をなす、光たゝへて帯のやうな流れに水を

連載小説

太白山脈

金史良



國民文學の要件

崔載瑞

一、國民文學は特殊な文學なりや？

今日吾々は健全な國民文學を建設すべき重大な責務を負は
 されてゐる。文壇の浮沈はこの一事にかゝつてゐると云つて
 いい。従つて國民文學論も盛んな譯であるが、有り體に云へ
 ば今日までの處國民文學論は各人各説で、殆ど歸する所を
 知らない有様である。一方に於いて國民文學を非常に狭いもの
 にして極めて排他的に考へたがる人々があるかと思へば、他
 方には又國民が感奮するやうな作品なら何でも取入れ
 ようと云ふ寛容主義の人々もゐない譯ではない。

國民的と云ふ文字を無造作に考へる人も困るが、然しこの
 際國民文學を餘り偏狭に考へるのも禁物である。國民文學は
 これから國民全體がかつて築き上げなくてはならない大いな
 な文學である。今から垣を作つて狭く閉ぢこめる必要はない。

殊に或る限られた事柄を限られた方法で書かないと國民文學
 にならないやうに考へるのは實は國民文學の前途を過るもの
 である。國民文學は須く高い目標と廣い範圍を持つべきで
 ある。中心に國民的の背骨さへしつかりしてゐれば無理に小ざ
 く固める必要はないではないか？

これは文學の效用についても云へる事柄である。若し直接
 且つ即時的に國策の宣傳にならないやうな文學は國民文學で
 ないと考へるとしたら、それは又どう云ふものであらうか？
 勿論今日高度國防國家體制下にあつて獨り文學のみが孤高の
 道を許される道理はない。否寧ろ文學こそ自己の天職に目醒
 めて積極的に國策遂行へ邁進すべきである。然しながら文學
 の使命は宣傳のみありと考へるならばそれは未だ考へるの至
 らざるものと云ふべきである。文學は意識的にでも無意識的
 にでも國家の宣傳手段になるのであるが、然しそれと同時に

(34)

日本植民地文化運動資料 10 ~ 12

滿洲及び日本植民地下の放送事業の全体像を
 知ることのできる貴重な年鑑！

10 滿洲放送年鑑

植民地の放送年鑑は本書が唯一。滿洲の放送事業が記述の中心を
 なすが、朝鮮、台湾、中国占領地、それにソ連の放送事業にも紙
 面を多く割いており、日本の植民地放送年鑑としての役割も果し
 ている。

全2巻 / 滿洲電信電話株式会社編
 昭和14年版・昭和15年版 全2冊
 解説 | 北山節郎 本体価格36,000円

國民文學

號月四



社文人

若き世代に與ふる書

12

'98年下期刊行予定

11

國民文學

復刊
第1版

崔載瑞主幹・人文社発行 「一九四一年～一九四五年刊 全39冊」

監修・解題 大村益夫「早稻田大学教授」

推薦 川村 湊「文芸評論家・法政大学教授」

金允植「ソウル大学教授」

三枝壽勝「東京外国語大学教授」

宮田節子「朝鮮史研究会会長」

体裁 全12巻・別冊1/A5判・上製クロス装/総6,000頁

揃定価 本体価格228,000円+税

ISBN4-89774-019-3 C3098

◆配本のご案内

第1回配本「97年10月刊」本体価格76,000円+税

第1巻 昭和16年11月号(創刊号)／昭和17年1月号 ※12月号は休刊 2冊

第2巻 昭和17年2月号／3月号／4月号 ※2・3月号は朝鮮語版 3冊

第3巻 昭和17年5・6月合併号／7月号／8月号 3冊

第4巻 昭和17年10月号／11月号／12月号 ※9月号は休刊 3冊

第2回配本「98年1月刊」本体価格76,000円+税

第5巻 昭和18年1月号／2月号 2冊

第6巻 昭和18年3月号／4月号／5月号 3冊

第7巻 昭和18年6月号／7月号／8月号 3冊

第8巻 昭和18年9月号／10月号／11月号／12月号 4冊

第3回配本「98年4月刊」本体価格76,000円+税

第9巻 昭和19年1月号／2月号／3月号／4月号 4冊

第10巻 昭和19年5月号／6月号／7月号／8月号 4冊

第11巻 昭和19年9月号／10月号／11月号／12月号 4冊

第12巻 昭和20年1月号／2月号／3月号／5月号 ※4月号は不明 4冊

別冊 解題(大村益夫)／総目次／索引



緑蔭書房

東京都板橋区板橋 1-13-1

☎03(3579)5444

※表示価格は税別です

特約店